

絆
きずな

東日本大震災津波被災校情報交換会を開催 ～これまでの取組を振り返り、今後の支援の在り方を協議～

東日本大震災津波被災校情報交換会は、平成27年7月31日(金)と8月1日(土)の二日間にわたり釜石市立釜石中学校を主会場として、東日本大震災津波の発災から4年が経過する中、意識の風化が懸念される状況において、各被災校との連携をさらに深めるとともに、「いわての復興教育」の積極的な推進を図ることを目的として開催しました。

会には、県教委課長、被災校校長、各地区会長、県中学校長会長等54人が一堂に会し、これまでの取組を振り返りながら情報交換を行い、これからの組織的・継続的な支援の在り方についての協議が行われました。



(講演に聞き入る参加者)

第一日は、開会行事に引き続き、大槌町教育委員会 沼田義孝委員長の「生徒たちに生きる力を」と題した講演が行われました。沼田委員長は、発災当時、大槌町立吉里吉里中学校の校長であり、生徒の安全確保を第一に考え避難したこと、その後、「感謝の心」「助け合う心」を学校経営の柱に据えたことなど、命を大切にし、力強く前向きに生きて行こうとする「生き抜く力の育成」が重要であることを話されました。

続けて行われた発表では、気仙地区から大船渡市立大船渡中学校 金賢治校長、釜石地区から大槌町立大槌学園 大森厚志学園長、宮古地区から山田町立山田中学校 福士幸雄校長の3人より、現在の学校や地域の状況とともに、課題やこれからの方向性

についての話題提供がありました。

その後、参加者が6グループに分かれ、「各々の学校の現状と課題」「今後の支援（横軸連携等）の在り方」の2点について、活発な協議、意見交換が行われました。以下、協議の後に行われた情報交流において発表のあった課題等を一部を記載します。

○時間の経過とともに、各々の被災校の状況が変わってきている。(皆同じではない)

○意識を風化させない取組が必要である。

そのためにも、学校情報を発信する取組を行う必要がある。

○横軸連携は、被災校の負担を考え無理なくすることが大事。

○バス支援の継続を強く望むとともに必要に応じて弾力的な運用も考えてほしい。

○家庭状況が厳しい子供も少なくないので支援が必要。また、ストレスなどに対する継続的な心のケアが必要。など。

学校や地域の復興の進捗状況による新たな課題への対応やこれまでの横軸連携の継続的な取組の必要性が確認された協議・発表となりました。

第二日は、ラグビーワールドカップ会場予定地や大槌町立大槌学園建設現場などを視察し、二日間の日程を終了しました。

なお、この情報交換会で寄せられた多くの情報は随時情報提供して参ります。



(グループ協議の様子)